

PROGRAM NOTE

寺西 基之 (音楽評論家)

ウェーバー：歌劇「オイリアンテ」序曲

カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786-1826) は音楽史上ではドイツ・ロマン派オペラの確立者として有名である。特にドイツ・オペラ史上における新しい時代を拓いた作品といわれるのが 1821 年に初演された代表作「魔弾の射手」だが、「オイリアンテ」はそれに続いて書かれたオペラで、1823 年に初演された。いかにもロマン派好みといった中世を舞台にした幻想的な物語によるオペラで、アリアや重唱やレチタティーヴォなどの間の区切りを明確にせず音楽の流れを連続させるとともに、ライトモチーフ的な手法を効果的に取り入れるなど、「魔弾の射手」よりもさらに書法を進化させ、のちのワーグナーの楽劇を先取りするような作品となっている。ただヘルミーナ・フォン・シェジーによる台本の拙さなどが原因であまり成功を収めることができず、今日でも上演機会は残念ながら少ない。しかしオペラ中の旋律を主題に用いた序曲は輝かしい魅力を持った名品で、演奏会のレパートリー作品として定着している。力強く生き生きと運ばれる自由なソナタ形式の序曲だが、展開部の途中にはオペラの中の幽霊の音楽によるラルゴの一節(弱音器付きの8本のヴァイオリンによる)が挟まれて幻想的な雰囲気を生み出す。

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op.73 「皇帝」

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770-1827) の残した5曲のピアノ協奏曲の中でも最も規模の大きいこの作品は、「皇帝 (エンペラー)」という通称 (ベートーヴェン自身による題ではない) で知られるとおり、華麗な独奏と力強いオーケストラとが繰り出す雄弁な響きと雄渾な楽想が威容に満ちた広がりを作り出す。作曲は 1809 年、中期の一連の大作群をとおして獲得したダイナミックでスケールの大きな書法が、協奏曲様式と見事に結び付いた傑作である。一方で、従来の協奏曲の慣習であった演奏家による任意のカデンツァを廃止して、カデンツァを楽譜に記した形で組み込むなど、新しい試みを行っている点もベートーヴェンらしい。とりわけ第1楽章冒頭に華やかな独奏カデンツァを置いているのは注目される。

第1楽章 (アレグロ) は協奏風ソナタ形式をとるが、今述べたとおり冒頭にピアノが華麗な独奏を披露する。ピアノとオーケストラとが互いに拮抗しながら展開する壮麗な楽章である。第2楽章 (アダージョ・ウン・ポーコ・モッソ) は瞑想的な主題が自由に変奏されていく緩徐楽章。そのまま続く第3楽章 (ロンド、アレグロ) は華やかに力強く発展するロンド・フィナーレである。